
七元一連の次元世界

成金歩兵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

七元一連の次元世界

【Nコード】

N7261U

【作者名】

成金歩兵

【あらすじ】

三人の主人公が七元一連という世界の異の世界を舞台に戦場を駆け巡る戦記物語！！

一人は氷の刀を持ち、炎の魔剣と契約をする心を閉ざした青年

一人は「魔弾」と言われた最強の名を残す青いバンダナがトレードマークの傭兵

一人は一国の筆頭騎士にして「竜霸王」の異名を持つ五千の竜を封印されし竜

「二国一領同盟」と言われる同盟が結ばれるまでの戦いを描いた物語

大半戦争！いろいろコメディー！ほんのちよつと恋愛！？意外と片思い？主人公の一人は恋愛にかなり無感情で初恋終了済み！？違う人は家族想いか？シスコンか！？ある人は苦勞人！？片思い！？案外両思いだったりして…………あれ？ヒロインは一人に一人ずつの純愛じゃない！？意外とハーレムかもよ…………

文才ゼロの素人作家が織り成す異世界戦記ファンタジー！！（一人は学園物を、一人は旅人を、一人は王国物を）

そんな感じでがんばっていくので暖かい目で見てください

第一話 氷の青年と魔弾の傭兵と竜霸王の騎士と

七元一連、それはこの世界の7つの世界とそれを結ぶ1つの世界で構成される合計8つの世界でできている世界を指す。

7つの世界はそれぞれ異なった異質の力が存在し、それぞれの生態系が構成されている護、獣、生、化、表、虚、混の世界と言った世界に分かれている。その中心となる世界は7つの世界の力を合成した世界と言っても過言ではない、その世界は異である。

この世界には、加護という物が存在する。

誰もが加護の力を持つがその力は、小さく、微弱な物である。だが、その加護を物に宿し、力を高めるとされる。そんな世界のことを次元学者は「護の世界」と呼ぶ

とある町のとある道場での事だ。

『せい！』

『せい！』

数人の小学生ぐらいの子供の声が一齐に道場に響きわたる。

子供たちはやや短め木刀を手にし、一生懸命に木刀を振るう……

そして、その子供たちの前に立ち指導しているのが――

「よし、今日はここまで」

高校生ぐらいの青年が稽古の終了を告げた……

『ありがとうございます』

子供達が声をそろえて、お辞儀をしながらそういった。

「今日も疲れたねー。」

「そうかなー」

「けど、いい汗かいたねー」

「それもそうだねー」

そう言いながら、そろそろと、帰っていく。

まだ、若いながらも立派な心がけである、どうやらこの道場には随分と素直な子供が集まっているようだ。

先ほどその子供たちの前に立ち指導を行っていた青年はあまがみひよつぎ天神氷義と言う名前を持つ、まだ16と言う若さでこの天神道場の頭首を務めている

彼は柔道着をきていたが、小学生の指導を終えたあと、すぐに、私服に着替えてた。

「毎日毎日、ご苦労じゃのお、氷義」

そう言いながら、奥の方から、お爺さんが出てきた。

「あつ、お爺さん、仕事は終わったの？」

「おお、今日は注文が少なかったからのぉ」

俺のお爺さんは包丁職人だ、ご先祖様は、刀鍛冶師だったらしく、お爺さんも、刀を作った事があり、俺も自分で愛用の刀を作ったり、短刀を作ったりした。

話によると、先祖代々、自分専用の刀を作ってきたらしく、その刀に自分の加護を宿したとされているらしい。

らしい、というのも、伝わった話だし、刀の製作技法も今では、あやふやだからである。

「氷義よ、今日も裏山に行くのか？」

「そのつもりだけど」

「早めに帰ってくるのじゃぞ、なにやら薄気味悪い天気じゃからの」「薄気味悪いって、夕方だけど天気はいいんだけど・・・まあいいや、行つて来る」

そう言うと、一本の刀が入った袋を背負い、家を出て行こうとすると「まあ、少し待つのじゃ」

「え？」

「お前も知っておるだろうが、あの裏山は……」「知ってるよ」「そうか」

言われなくても分かっている

10年ぐらい前あの裏山で親父と妹が消えた……お爺さんはそのことを言っているのだろう、だが俺はあの裏山に行くことはいつものことでそんなことは一臂とたりとも気にしていない

「それじゃ」

彼は家を後にした

40分程、山を登ったところで少しは開けた所があり、彼は刀の鍛錬をしていた。

「はあー！」

「せいや！」

「ていや！」

氷義は愛刀の氷牙を構え、素振りをしていた。

ブン！ブン！蒼い刃に白い峰の刀、風を斬る音がすると共に速い太刀筋で、刀を振るっていた。

「よし！」

氷義は、気持ちを落ち着かせ、刀を構える。

……次の瞬間、氷牙から、冷気がでてきた。

その時、風が吹き、周りの木の枝、ガサリと揺れ、数枚の葉が落ちてきた。

「！」

目にも止まらぬ速さで刀を振るい、木の葉を切り刻む、まるで風に吹かれたように葉はまた宙を舞う

「天神一刀流、無氷の義の陣、吹雪」

彼はそう呟き、刀を一振りし、カチツツと音を立て鞘に収めた。す

ると、宙に舞った葉はバラバラになり、一瞬に凍りついた。天神一
刀流というのは天神道場の流派で、彼の使ったのは我流の流派であ
る。元々天神の流派はバラバラで、基礎の技だけが流派の共通点で
他はすべて我流であり、彼がいまやって見せたのも我流の一種であ
る。

彼は毎日、ここへ来て、少しでも鍛錬を行っている。彼の心のうち
には俄かに父の後姿と幼かった妹の姿が残る。

ゴロゴロゴロ、いきなり雲行きが怪しくなっていた。

お爺さんが薄気味悪い天気と言っていたのはこのことなのだろうか、
さつきまであんなに晴れていたのに、いきなり雨雲が空を覆う

「雨が降りそうだな、久しぶりに、あの道を通って帰りますかな」

あの道とは、道場までは1番の近道だが、急な斜面で、なにより、
疑惑つきの道なのだ、噂では、人が消えたとか、だが、そんなこと
は気にせず通るのがおちだった。

「よつと、相変わらず、急だな」

そこは、斜面が急なうえに、えたいの知れない奇妙な穴が開いてい
る。

「雲行きが怪しいし、日も落ちかけてるし、急ぐとしますか」

そう、言ったとたんに、ポツポツと雨が降ってきた

「うわ！最悪だ、急がないと」

そういったとたん、雨はザーと降り出し、氷義は足を滑らした。

「のわ！」

滑り落ちた所が災難なことに、あのえたいの知れない穴に転がり下
りた……………

「一体何が起こったんだ??」

氷義が目を覚ましたのは、そこは、一面真っ白な空間だった
こっつてどこだろう

なんか、一面真っ白なんだけど、たしか、雨が降ってきて、急いで

下山しようとして、足を滑らして、穴の中に落ちて……

気がついたらここに居たってわけか。

「気がついたようだな」

えっ？誰？どこどこ？

氷義は体を起こし、周りを回りを見渡した。

「なんだ、空耳か……ハア……」

氷義は、辺りを見渡しても誰もいないので、なんとなくため息をついた。

「後ろだ、後ろ！」

そういわれ、振り返ってみると……

「……………」

そこには、ショートヘアーで、髪を後ろで一つに括っている真紅の髪に黒いローブを着た……青年？いや、20代の男性？

「なんだ、その無言で俺を見る目は、まさか、こんなのが神様だとは思ってもよらなかったか」

「中二病？」

「違うわ！俺は本物だ！ほ・ん・も・の！」

え？マジか！っあ、なるほど、神じゃないとこんな場所つくれないもんなーって、納得できるわけねーだろが！

「……マジか？」

「マジだ！」

「証明できますか？」

「それなら……うん……君、次元学って知ってる？」

「えーっと、世界のつながりの原理のことですよね」

それがどうかしたの？っと、そう彼は？マークを頭に思い浮かべる

「つまりは、私がこの世界の繋がりを管理する管理者と言ったところだ」

「……つまりは次元学者の頂点に立つ人？」

「どういうことだ？」

「君の居た世界は加護という物があつただろ」

「はい、それはそうですね」

「君が行く世界は、聖霊や魔物、妖精と言つものが存在する世界なのだよ」

「・・・なんだろ、このゲームでありそうな設定・・・これは中二病の神様の妄想の世界ではないのでしょうか」

「それは、なんとも興味が湧く世界というより、随分とメルヘンですね」

「そこは、了承してくれ」

「そこでだ、その世界の環境に耐えられるように君に力を授けよう、君をこんな所に飛ばしたのは、俺の責任だし」

「それはありがたいのですが、その力ってなんですか？」

「それはだな、その世界には、聖霊や魔物、妖精などを従えるために契約を結ばなければならなくてな、その契約する力でだな……はいこれ、異世界の人間が契約するための道具」

手渡されたのはルビーに似た丸い宝石の様な物がはめ込まれた一つの指輪だった

「神様ー、一つ質問があります」

「なんだ？」

「契約に制限ってありますか？」

「有る……っといつても契約するかどうかは君しだいだし、その制限は君の力量しだいでもんなものになるかは分らんし、その力を通用させるかどうかの君しだいだ」

「なるほど」

つまりは俺の力量がどのくらいかでどんな奴と契約できるかが決まるわけだ

「ああ、それから、いつも刀を持ち歩くのは面倒だろうからこれを使え」

渡されたのはまたもや指輪

「何ですかこれは？」

「そういえば君の世界には魔装具がなかったな、まあとりあえず君の刀をその指輪に飲み込ますイメージかな」

なんつー言い方しやがる

「飲み込ますって……」

彼は呆れた言い方で氷牙を持ち、指輪を指に填め、指輪と氷牙を一つにするようなイメージをしていると、自然と魔力を流し込んでしまった……すると

「ほ……、なかなか筋がいいじゃないか」

氷牙はその刀の姿を粒子状の物に変え、指輪に吸い込まれていった「使い方は大体分かるだろ」

「まあはい、一応は」

なんかこの人適当だ

「まあ、契約の方法はそのときになれば分かるよ」

「適当すぎる」

「まあまあ、契約のことに關しては本当のことだから」
それでももう少し説明してほしい

「そういえばこれを渡さなければならぬな」

「これは、手紙？」

「それを持つて、セントリナ学園というところに行け、そこが君の過ぐす学園だ・あと、あちら世界に行くとき多分、封印の森という場所に居ると思う、だから、そこから北へ進んでくれ、そうすると学園が見えてくる」

あ、今度はしっかりとしてる

「あゝ後、セントリナ学園の学園長の名前はグラム・ブレイズだから」

「うゝん、異名？それとも本名？」

「どうだろうな、それじゃあ、君をその世界へ飛ばすぞ」

「お願いします」

「では・・・行つて来い！」

「のわ！」

いきなり、足場がなくなつた……………つてまた落ちるのか！

「チヨイ待てこらあああああ……………」

一方その頃、他の世界……………

この世界には魔装具バースと言つものが存在する

魔力を魔装具に流し込む事により、ネックレスや指輪、ブレスレット、他にはチェーンなどなどのアクセサリーを剣や槍などの武器本来の姿に戻す事ができる便利な物である

その武器にも、魔力を流し込む事で、本来の力を使う事ができる
例を挙げると・・・銃などで、銃は極端だが、実弾はなく、魔力を弾丸に変えた魔弾を打ち出すと言う原理である。

そんな世界を次元学者は「混の世界」と呼んだ

〵とある町の小さなギルド〵

ギルド、それは傭兵達が集う場、そこでは貼り出されている傭兵募集のビラや大型モンスターの討伐依頼などは張られた掲示板や食事を行う酒場などがある場・・・

そこに白のジーンズとオレンジの長袖のVネックの服装で蒼いバンダナをしたとある傭兵がカウンターに座っていた居た・・・

「おい、見るよあれつて魔弾じゃねえか」「ああ、あのバンダナだ

とすれば奴だな」「魔弾は相変わらず一人で居やがる」「奴も傭兵なら、仲間の一人ぐらい居ないもんかね」「噂じゃあ、唯一の家族とあの魔剣士を殺ったやしいぜ」「俺は逃げられたって聞いたけどな」「俺は狩ろうとした奴に……」

周りからは彼の善くない噂ばかり、彼は現最強の傭兵、異名は魔弾、本名はあまり知られていない……

数年前までは彼の名を知る人も多く居たのだが、ある出来事によりその者たちは死んでいった。

ギルドの登録記録によると、彼の名前はエルド・デイスティ、使用する魔装具は銃、二丁装備しているが、その内の一丁が特殊な加工を施した拳銃にしては大きすぎる物で、普通の拳銃の二倍、もしかするとそれ以上かもしれない、片方は自動式拳銃を使用、もう片方は大型の回転式拳銃となっている。

五月蠅い、とてつもなく周りからの雑音が多すぎる……魔弾がどうのこうのはどうでもいい

「落ち着いて酒の飲めやしない」

独り言の様に呟く、実際は独り言だ……仲間やら昔は居た……十分すぎるほどにだ……ある事をきっかけに多くのやつらが去っていった……あの二人は別としてだがな

俺は一人、現在での話はなしになるがな

最強とはよく言ったものだ……人一人守れないようじゃ話にならない、強いどうのこうのじゃなくて守りたいものを守るかどうかだもう一度、一瞬でもいい、あいつ等に会いたい、そして謝りたい……

・
エルドは酒の入ったグラスを傾け、一人孤独にカウンターに座る……その周りには誰も居ない、他の傭兵は彼を避け、関わろうとしない……

彼曰く、何も昔からこんな感じで見られていたわけではないらしい、彼がこんなに悪く見られるようになったのは2年半ほど前から続い

ている戦いで一度だけ狩り出された事があったのだが、その戦いで彼は……

「た、大変だー！街に奴らが、モンスターが、進入してきたー」
一人の男性がギルド内へと慌てて駆け込み、そう叫んだ・・・
（は？なんでモンスターが街に？・・・まあ、俺にはどうでもいいさ、さっさとこの街を出るか）

騒がしくなるギルド内、それに乗じてエルドは椅子にかけていた木色のマントに身を包み青と白のストールを首に巻き、気づかれることなくギルドを出た・・・

「こ、こうなつたら魔弾にでも頼んで・・・って、奴は何所に行った」「さっき誰かが出ていたが、まさかそいつが魔弾か！」「あの野郎、真っ先に逃げ出しやがった」

まるで人事のようにギルド内に居る傭兵は他人に押し付けようとす
るものの、その頼みの綱が居なくなつたことにより、よりいつそ混
乱し始めた・・・この光景を住民が見たらどう思うことか、いくら
傭兵が自由な奴らばかりとはいえ厭きれるばかりの光景だった

・
・
・

エルドはギルドを出て、街を見てみるとそこはすでに火の海だった。
・・・そこには多くのモンスターと燃えて崩れ去ってゆく街の光景で
いっぱいだった・・・

「こりゃ、街というより死地だな・・・傭兵としては気が乗らない
が、ちよつと遊んでいこうかな」

そう言うのと彼の左手の中指にされていた指輪が光り、そして左手に
は回転式拳銃の愛用銃ブレンテンが握られて、指輪が消えていた

「ゴオオオオ・・・」

「いきなり、ボスのお出ましか」

やや離れた所から翼の生えた巨大な人型のモンスターが飛んできた。
・・・その姿はまさしくガーゴイル・・・ガーゴイルでも、上級に位

置する種類の奴が飛んできた

「こんだけ広い街なのにいきなりコイツに見つかるとは、とことんついてないようだな」

ガーゴイルは空中でなにやらおかしい動作を始めた……まるで身を犠牲にして魔法陣を描くようだった

「一撃だ……一撃で仕留める……」

エルドはガーゴイルに銃を向け、魔力を籠め始める……だが、その間にもガーゴイルの体は崩壊を始める

（奴は身を挺して一体何をしている……モンスターは魔法なんて使えるはずが……いや待てよ、年に数回そんなことをするモンスターが出るって噂で……そうか、あいつ等もそれで！）

一瞬だが、エルドの気が反れた……その瞬間だった、ガーゴイルは魔法陣を完成させ、その強大な魔力で、鉄球のような魔力の塊を創り、その攻撃を放った……

「ッ……はあああああ……一発イテッ！ やつをお見舞いしてやるよ！」

ズバーーン、エルドの銃からは考えもつかないほどの魔弾が放たれた……そう、二つ名の由来はここから来ているのだ……

そのときの事だった、ガーゴイルの放ったその強大な魔力とエルドの放った魔弾がぶつかり合った瞬間事だった……次元の扉が開いた……あの時の様に、次元の扉が……その瞬間、ガーゴイルは去っていった、と言うより、もうすでに居なかった……

（やばい、吸い込まれる）

だが、すでに遅し、エルドは次元の扉へと消し「異の世界」へと旅立っていった

またもや、他の世界では……

この世界は「異の世界」全ての世界の集合体といっても過言ではない、そんな世界のとある大陸では全ての国が入り交ざったの大規模な戦争中

時間を少し遡って

　とある敗戦国

ここは元魔族国バルマスの魔城レリポマス、かつては難攻不落と言われた城も今ではただの城、そんな城の謁見では……

「デイグル、分かっておろうな」

ずっしりと響くワントーン低い声、その声を発しているのはギニマドラ帝国総帥ボガルド・ヴァイツ

「重々承知しております」

そう答えるのは元魔族国バルマス筆頭騎士デイグル・モラール、彼の置かれている状況はあまりにも残酷で悲惨な状況だった

「少しでもおかしなそぶりを見せればあやつらの命はないぞ」

「はい」

あやつらとは彼にとつての主や同胞たちの事で、帝国軍はその人たちを人質として彼を操っている

「デガル、貴様は兵を率いて西から攻めよ、我々はコヤツと共に北から攻める」

「ははっ！ 仰せの通りに」

答えたのは黒鎧こくがゐの雷狼騎士らいろうきしと名高いデガル・ゼナートだった

「うむ、では明日支度が出来次第出陣する！ 分かったのならばデガルとデイグルは下がれ」

「ハハッ！」

二人は謁見を後にした

彼は謁見を後にして、城内のある廊下での事だ

「クソッ！！」

デイグル・モラールは壁を殴り、ガックリとうな垂れる

「俺は、俺はなんて無力な人間なんだ」

よく筆頭騎士だなんていったもんだ、ここまで無力な人間なのにあの方は俺に気を使ってここまでしてくれた。だから今度は俺があの方を、皆を守らなくいけない、なのに俺は帝国軍になすすべもなく敗北した。そして奴は、ボガルドは俺にこう言った「我々に従えばそちの主たちの命は取らんでやろう」と、俺はその事に対してせめてもの罪滅ぼしと思いその誘いを受けた……だが、あの方はその事に對し大変心をお痛めになった。あの方は他人のためになら命さえ惜しまない優しい姫様だ……なんだか、どこかの姫様も似たような人だった気だするな

「すみません」

彼の背には多く人の想いがあり、そして今、その人たちの命はボガルドの手の内にある

つい数日前まではみんなで笑って、みんなで楽しい日ときも過ごせたであろう

「この国にまだ魔王が居れば何とかあったのだろう」

遙か昔、魔族国にも列記とした魔王が居たと伝えられている

「待ててください、今助けます」

彼は守るために武器を手にし、明日を生き抜くのだった

第二話 氷の青年は炎の魔剣と出会う

「……………っは……………はあ……………」

なんだろう、この、目を覚ましたら森の中っていついかにもありがちなこの場面、ゲームでよくあるパターンだねー。彼は森の開けた場所で目を覚まし、体を起こして辺りを見渡す。

「確か、北に向かえって言ってたな」

彼はあの人が言っていた事を思い出した。

なにが——多分、封印の森の中に居ると思う——だよ、マ

ジじゃねえか、まったくもつとましな所に飛ばせよ

まあそんな事を思っただけでも拉致があかないので彼は歩き出す。

うーん。この明るさと太陽の位置的には今は朝と考えるのがいいのだろう、世界の時間が繋がっていると考えるのなら俺は夕方から朝まで寝ていたこととなる。

そんなことを考えながら、北へ向かっていると、洞窟が目にとまった

「なんか、この洞窟から変な感じがする」

だが、俺はあの人が言った事を思い出す。この世界には魔物や聖霊とかがいると、だとすればこの先は危険で、もしかすると生きて帰れない可能性もある。

そう考えるととても怖く、そんな覚悟も入るのも足かすくんで動けやしない

「……………天神氷義、ここで下がれば男が廃る！」

俺は勇気を振り絞って洞窟へと脚を進めた

洞窟に入って少し進んだところでこう思った

周りから何か弱い力を感じる……………」

「……………試してみるか」

彼は氷牙を封じてある指輪に魔力を注いだ……………」すると彼の手元に氷牙が現れ、彼はそれを握った

シューウウウウ、氷牙から白い煙が上る

ブン！氷義は、氷牙を一振りした……

すると……刀の刃の部分が、サファイヤの如く蒼く輝き、峰の部分が、白銀のような白さで光輝き、透き通るような綺麗な氷で包まれる「なるほどね、これがこの世界の環境か……」

俺は刀を構え、近くにあった岩を思いっきり斜めに切り込んだ

スウウウツ、荒い音を一切立てず、紙を斬るかのように、静かに岩を切断した

「……！」

ミシミシと切断した岩の断面が凍っており、そこから、徐々に岩が凍っていった

「以前より断然力が増している……」

彼は氷牙を指輪の姿へと戻す

「はは、ははは……」

今、一瞬だけ、退屈だった元の世界が懐かしく感じた……

帰りたいとは、思わない、だが、氷牙を作り上げたあの感動がこみ上げてきた。あの感動、あの純粋な気持ちで懸命に刀を打ったあの頃はじめて加護の力を使ったあの頃を……

いつから、いつからだろうな、俺の心が凍りついたのは……

そうか、氷牙を作って間もない頃だったかな、あの事件が起きたのは……16人だったかな、忘れもしないあの頃を……

氷義は、少しの間そこに立ち尽くした。

「……はっ！」

氷義は、なんとか、ネガティブな気分からやっと抜け出し、さつき切断した岩の断面を見た

そこには、鏡を見ているかのように、自分が映し出された……「……え？」

そこには、銀色の髪に、右前髪に薄い青のメッシュが入った中の上辺りの顔立ちをした自分が映し出されていた

……なんでメッシュが入ってんの？と言う疑問。以前の氷義は、メッシュなどは一切入れておらず、なぜか今はメッシュが入っている

状況

……そういえば！加護のあり方で本人の姿も変わるって聞いたことがあるような……それなら、辻褄が合う……そろそろ先に進むか

氷義は、洞窟の奥へと進みだした

あれ、中は意外と明るいもんだな……って、中は鍾乳洞とかあるんだ……ってか、なんか明るいなーって思ってたら、虫の光か、これだけ綺麗だと、心が和むなー

そこには、とても幻想的で虫の光によって、ぼんやりと映し出される鍾乳洞があった

ちなみに鍾乳洞は、海底でサンゴなどが堆積することによってできた石灰岩が地殻変動によって地上に隆起し、雨水や地下水によって浸食を受けてきたものです。石灰岩は一般の岩石とは異なり、主成分である炭酸カルシウムは二酸化炭素が含まれ地表の水にはよく溶けるので、通常の岩石より激しく浸食され、その内部に多くの空洞を生じるようになります。結果として、表面には溶けた石灰岩の残りが突出し、内部には空洞を生じ、鍾乳洞が作られます

氷義はそんな風景を楽しみながら、奥へ奥へと進むと……

……剣？……あれは剣だよな

いかにも、抜ける物なら抜いてみる！と言わんばかりに、大振りの剣……いや、魔剣のような禍々しい気を発する大剣が立派な祠に刺さっていた……つかコイツが変な感じの正体だったのかよ……

聖霊、魔物、妖精のどれかだよな……予想からすると魔物だ

と思う・・・ここまで来たんだ・・・抜くしかないな

氷義は、覚悟を決め、その大剣の前に立とうとしただが……

「俺の限界か………」

そう、あの人が言っていたように俺の力量しだいで契約できるか否かが決まる。自分の限界は案外自分が一番知らなかったりするものでうかつには触れたくないものでとても不安で怖いものであった
氷義は少し悩んだ・・・下手をすれば死という命の選択を……

「俺の手はもう血に塗れている………」

そう、俺はもうすでに16人もの人の命をあやめている。それがどんな理由であれ俺は16人もの人の命を奪った人間だ。ならここで死ぬと言う事はこれまで犯した罪の償いとされるだろう。だが生かされるのであればが他人の命を重みを背負ってこれからも生きてゆこう。

「さあ、契約の時だ………」

俺は剣に右手をかざした時のことだった……

『死の臭いがする』

「え？」

何処からか声がする。まるで頭に直接流れ込んでくるようだった

『不快だ………まだ足りぬ、我は貴様の力を知らぬ』

「これって、まさかのまさかだよな………」

おそらく、この剣から声が来ているのだろう

『我は紅蓮の炎を司る魔剣………』

「魔剣………」

『炎剣テオダーナなる者なり………契約とするとならば名を申せ』

「お、俺は天神氷義、契約を所望するものなり」

『ならば貴様の力を量らせてもらおう』

その時だった。全身を焼き尽くすような魔力が俺を襲う。

「う、うがあああ!!」

体内から焼き尽くされるかのような痛みと熱さに俺は膝を折った。本当に燃えているような感覚で伝わってくる魔力は重々しくて何所

かあいつに似ている気がした。

「がああああ……！」

このままでは体を飲まれ、次には体まで飲まれる。きつとあいつの力もこんな禍々しい炎だった気がする……

『所詮はこの程度か』

と、痛みを感じながらもそう聞こえてくる

「ま……だ、俺の……義……を、しめ……しては……いない」

『ほう、まだ喋る余裕があるか』

正直を言つとそんな余裕は端からない。だが、俺はまだやりきれなかった

「義は……俺の……義は……ここ、で……潰えたりはしない……」
その時だった。俺は最後の力を振り絞つてありったけの魔力をぶつける

『グッ！……少しはやるようだな』

あの魔剣から伝わり襲ってくる魔力が退き、その開放感からか俺の額には汗が浮く

「ハア……ハア……ハア、ハア……ハア……」

魔力は退いたものの、体を動かず、荒い息だけが上がる

『息は上がっているようだが意識すら失わんとは徐々に面白い奴と戦えそうだな』

そんな事を言われているようだが、正直な話、意識を保っているだけが限界です。

俺は気合で態勢を立てないし、後ろへと下がり、氷牙を出して構える

『ほう、剣と扱いはできるようだな』

なんか、地面に刺さった剣に「剣の扱いはできるようだな」と言われるのは何かとシニールすぎる上に、俺は一方的に剣に話しかけられているということに関してはどうしたらいいのでしょうか。

『いざ、勝負！』

突き刺さった剣からは炎がブァツと放出され、黒い人影が炎の中に写る。その姿はあの人と何故か似ていて何処となく大きく違う

「天神一刀流、守護の陣！」

それに対して彼は刀を正面に構え、守護の陣と呼ばれる防御体制に入り、周囲に魔力を巡らせて守りやすい場を作る

『小細工など無意味！！』

黒い人影が剣を抜き、その剣の一振りで燃え上がっていた炎は消し飛び、剣からは赤い斬撃が放たれる。その斬撃はまさしく魔力の塊と言ってもいいほどに魔力が感じられ、禍々しかった。

「天神一刀流、守護の式、逆さ柱！」

彼がそういった瞬間、先ほど周囲にまいた彼の魔力が地面から彼を包み込むように真上に噴出す。

「天神一刀流、無氷の義の陣、絶氷」

そして、彼を包み込んでいた彼の魔力は氷へと姿を変えて、彼ごと凍りついた。

そして、魔剣から飛んできた斬撃はその氷の柱へと直撃し、いきなりの温度差によって煙が発生する。

『フツ……………所詮はこの程度か』

魔剣はそう言い捨て、剣を払う

「一人で勝った気になつてんなよ！」

刹那、煙の中からいきなり氷のつぶてが無数に飛んできた

『このまま死んでおけば楽な思いをできるというのに！』

魔剣はとっさに剣を振り上げ、炎の壁を作り、氷のつぶての方向を逸らす。

その氷のつぶては溶けることなく魔剣の周囲の落着地面を凍らす

「まだまだー！」

彼は大量の冷気を帯びた刀を振り、空中に冷気が舞う、そしてその冷気からは氷のつぶてが発生し魔剣の元へと飛んでゆく

『……………くっ！』

さすがの魔剣でも全ては防ぎきれなかったようで、数発魔剣にあたり凍らし始める。だが魔剣は自分の体に炎をともし、氷を溶かそうとする

「俺の氷は俺の義、溶けやしないよ」

『降参しろと言いたいのだな』

魔剣は自分の炎を払いそう言う

「平たく言えばそう言う事」

『ならば一つ聞きたい、貴様に人を殺す覚悟はあるか』

「……………覚悟なんてあってもなくても俺のした事は紛れもない人殺しだから、この先俺がどのくらい人を傷つけようが俺の手はすでに汚れてる。後はどのくらい俺の罪が重くなるかの問題だから……………覚悟はあの時からしてるんだよ」

『ほう、貴様は我に何を示す』

「……………義を示す」

『ならば貴様の義を契約の証といよう』

「天神氷義、今ここに義を持って契約を望む」

彼は魔剣に指輪を向けてそう言う

『我、炎剣テオダーナ、貴様の義を持って契約に応える』

「『今ここに義の契約を成立させる』」

刹那、その場がいきなり光に包まれた。

まだ目の覚めない夢の中なのだろうか、俺はただ懐かしいようで新しい感じのする場にいた気がする

『義……………か』

誰だろう、真っ暗で何も見えない

『さあ、目を覚ますのだ主よ』

何処からか声が聞こえてくる

『早く起きるのだ主よ』

仕方ない、起きるとしますかね

「……………はっ！」

『やつと目を覚ましたか主よ』

どうやら今度は契約の指輪を通して声が聞こえているらしい……だ
って周りには誰も居ないのだから…

「あゝ、魔剣さん？」

『神名はアルバ、主となった主はアルバと呼んでほしい』

「あーうん。よろしく」

今、この時、俺の新しい物語の幕が上がった

第三話 魔弾の傭兵は新たな出会いへ

貴方は他の世界と言うものを信じますか？ちなみに俺は仲間が他の世界に飛ばされるまで信じもしませんでした。学生時代は教科書に「七元一連」って言う物があるってことは載ってたけどそんな物はありません！と思ってたけど、実際こうなってみると新鮮だなと思う。たしか……俺が居た世界は「混の世界」だったから、行き先は七元の世界を結ぶ「異の世界」だったと思う

この世界は8つの世界に分かれている………と言う事くらいは知っている

俺だって多少の次元学については知っている

……次元の扉についても年に数回できることも知っている

あの二人も次元の扉によって別の世界に飛ばされたのだから………

「あ、あれ？ここは……何所だ？………あゝいや、飛ばされたっけ」

気が付けがそこは茂みの中、少しはなれたところには広大な荒野………

……いや、荒野は荒野だが、他のところを見れば一面が雪で覆われている。

記憶を遡ればあのガーゴイルと戦って飛ばされた、としか覚えていない

「戦場………そんな寒い中よくやるよ」

広大な荒野は多くの人の手によるものであろう、人工的に溶かし、戦いやすい状態にして戦局を有利にしようとしているのだらう、それを証拠にそう遠くない場所で人が戦っているのだ見える。ただ、この寒さは不慣れな俺には少しキツイ、できれば一刻も早く暖かい場所に行きたい。

マントとストールを巻いていてもこの寒さは少し厳しい

「さてと、どうしようかな」

今俺の居る場所はちょうど両軍の真ん中付近だから戦いに割って入って大暴れするもよし、このままどこかに行くものもよし、ここに

長居すれば俺の身も危ういかもしれないからできるだけ早く動く方がいいだろう

「あの戦いで雇い主が見つかるかは知らないが、異世界と言うものを俺は知らなくてはいけないよな」

考えとしてはこの世界の戦いと言うものを見てみてこの世界で俺の力がどのくらい通用するか知る必要がある。それに、なにやら前の世界より体が軽く、魔力もめぐりも良い、そう考えれば前の世界より数段力を発揮できるのであろう。

考えのついた彼は戦場へと姿を消す。

そんな戦場での事だ

「グオオオオオオオオ!!!」

戦場の最前線、一人の槍を構え馬にまたがる騎士、そしてその騎士と共に唸りを上げ、敵を蹴散らしてゆく騎士の契約精霊であらう白いゴーレム、その勇敢さは評価に値するだろう

「たあー！ていやー！」

その騎士は退くことなく次々と敵を倒し、同軍の同胞を守る。だが、数としては圧倒的に不利で、一度崩されれば全滅するのだろう

「スクレイド団長！もう無理です！ここはいったん退きましよう」

一人の部下がその騎士にそう告げる

「だったらお前らは引け！ここは俺が死守する！」

彼は槍を構え、向かってくる敵を吹き飛ばす。

だが、また敵が彼に襲い掛かる。共に前線に立つ白いゴーレムも限界なのだろう、そのゴーレムは膝を付き、動きが著しく低下していた「へー、こんな寒い戦場でたった一人でそんな無茶言う奴は初めてな気がする」

刹那、その騎士に襲い掛かってきた敵兵が一瞬で目の前から弾き飛ばされる

「新手か？」「何者だ！」

「お前からすれば敵にも味方にもなる傭兵」

突然の事だった。左方から一人の傭兵が現れたのだった。その傭兵

は左手に構えた回転式拳銃で敵を次々と打ち抜いてゆく

「お前らは引いてアニア様の居る本陣まで退け」

「スクレイド様、何をお考えですか？」

「あの傭兵、帝国軍を攻撃しておいて敵にも味方にもなると言っていた。だとすれば味方になる可能性がある、それに面白そうな傭兵だしな」

彼は騎馬から降りて槍を手放した

「後は頼んだぞ……」 「ハッ！」

騎士は自分の契約精霊の白いゴーレムに近づく

「バツツ、あと少しがんばってくれ」

「ゴオオオオ」

騎士はゴーレムに手を当てて、こう言うと、白いゴーレムはそれに応えるかのようにその巨大な姿を白く美しい白銀のランスに姿を変えた

「さて、行くか……！」

彼は敵軍へと突っ込んで行くのであった

視点はエルドに戻り

「数だけそろえりゃいいもんじゃねーんだよ……！」

バン！！バン！と、連続で響く銃声と共に、敵軍の兵士はバタリバタリと倒れてゆく、その一方で汗一つ掻かずに的確な射撃で敵を次々と魔弾で打ち抜いてゆく彼はかなりのものだ

「くっそ、これじゃあ拉致があかね」 「にや」

「おい、シャム、お前はこのタイミングで普通出てくるか？」 「にやにや！」

いきなり彼の赤い粒子と共に、現われたのは赤い毛並みの子猫で、彼の肩にひょこんと乗る。この猫は彼の持つ魔装具に封じられたモンスター的一种で、大概が勝手に出てきて彼の肩や頭に乗っているという始末、人にはあまり懐かないが、主人である彼にはとても甘えん坊で場を問わず出てきては彼に付きまとう猫、だが彼の持つ魔装具の中でもトップクラスの強さを誇り、一人のときはこの猫が彼

の支えとなってきた

「シャム、甘えるのは後にしてくれ、とりあえずこの敵何とかできるか」

「にゃーにゃにゃー」

シャムは彼の肩から降りたと思えば、今度は赤い粒子になってその場に散らばる

「シャム、火猫のマーチだ」

ポオオオオオ！！！赤い粒子は一瞬にして炎となり、その場の敵を焼き尽くす、その火力は折り紙つきで周囲の雪も一瞬で水蒸気になった

「シャム！その白いランスの奴は燃やすな！敵じゃない！」

どうやら彼は、あの騎士が近くに居た事に関して気づいていたようで、シャムにそう言っていると、炎はその騎士を避け、ほかの兵を燃やし尽くしてゆく

「アンタ、面白い連れを連れてるな」

「そう言うアンタは変わった武器を持ってるな」

「まあお互い様って事で」

騎士はランスを振りかざし、敵を吹き飛ばす。なにやら、敵からはバッキイイなどと、かなり危ない音を立てて吹き飛んでいった事に關しては無視すべきなのか、そのネタに触れるべきなのかは黙っておこう

「だが、俺はまだ隠し玉を持ってるんだよ！」

彼も負けじと銃から魔弾を放つ、するとその魔弾は拡散し、多くの敵を射抜いた

「俺だってまだ本気を出してねー」

騎士はランスを大地に突き刺す。すると地面から土に柱が立ち、敵兵を襲う

「それで本気じゃないとは、大した奴だな、戻れシャム」

彼の呼び声に対し、シャムはすんなりと応じ、元に姿に戻り、彼の肩に乗り、寒そうに彼の首に巻いてあるストールに潜った。と言う

もの、敵は腰を抜かしたものが多く、前線を放棄し逃げ出すやつらが続出したと言う事だ。

「随分と暴れるのが好きな傭兵だな」
そう騎士に言われた。

暴れているように見えているだろうか、俺自身はそんな気はなくても、他人からすれば暴れているように見えているようで、どうも悩ましい事だと思っている。そういえば昔からんな風にいわれていた気がする。つまりは今も昔も変わりはしていようだ

「傭兵なんて好きなように戦うのが普通だ………もちろん今回もそうだったけど」

「ふ〜ん、じゃあさ、俺たちの軍に来るか？」

どうやら、この騎士の本音が出たようだ。多分前線にまで来たのもそのつもりだったのだろう、まあ、俺としてもありがたい限れなのだな

「それはあんた等次第、雇おうか雇わないかは自由、無論、俺にも拒否権はあるがな」

「それは言えてるな」

笑って言ってみせるこの騎士、大物なのか、バカなのか

「まあ、とりあえず、暖かい場所ないか？ シャムが寒がつてる……

…ってか、俺も寒い」

「シャム？ それって、お前の猫の事か？」

「あゝそうだ、名前を名乗ってなかったな、俺はエルド・ディステイ、そしてこの猫がシャムな」

すっかり忘れていた。礼儀としては少しだめだな

「俺はスクレイド・レメル、騎士団長をやっている…………そんで、本陣来る？ 火を焚いてるだろうから少しは暖かいと思う」

「じゃあ、連れてつてくれ」

「ちよつと待てよ」

やや離れたところから声がした。その声に対し、殺気を感じる。声は敵軍の方からで、見てみるとグリフィンに乗った一人の騎士が

空を翔け、こちらに飛んできた

「デイグル、何でお前が帝国軍に居るんだ」
「どうやらスクレイドは面識があるらしい」

「この戦いでユナリア軍を潰す」

一瞬でも気を抜けば殺気と威圧感で気を失いそうなほどの邪気だ。
二人の前には黒と白の毛並みをしたグリフィンに跨り、軽量でも頑丈そうな赤と黒の塗装が施された鎧を身に着け、ハルバートを構える騎士が立ちふさがった

「魔族国が落とされれば帝国に就くほどお前は安い奴じゃなかっただろ」

スクレイドはこの騎士に対しそう訴える

「アンタには俺の気持ちなんて分かった事じゃないだろ!!」

彼は唇を噛み、悔しそうに言う

「デイグル、何があった」

「これもりニカ様や皆の為だ……… デイグル・モラル、押して参る」

刹那、俺たち二人の前から一瞬にして姿を消す騎士

「エルド！一瞬でも遅れれば死——」

ガギギイイイ、激しい金属音と共にスクレイドの言葉が止まる。
ふと振り返るとスクレイドとデイグルと名乗る騎士は激しい鏢迫り合いが行われていた。

「皆のためだ………」

「ぐううう!!」

ランス対ハルバートでは相性がランスの方が不利に決まっている。
豪腕の持ち主であるスクレイドもかなり押されている。このままでは危ないと感じは俺はあの騎士に向けて魔弾を放つ……だが、その魔弾は何故か騎士に命中する手前で消し去られた……なぜだろう、何かに当たって何かが消し飛んだ気がする、結果？いや、あれはあの騎士の邪気なのだろう、じゃなければスクレイドのあの武器に対してあそこまで有利に戦えるわけがない、それに……… なにか変な感

じがする

「ならばっ!!」

今度はスクレイドの前から姿を消す

「エルド!!!」

スクレイドがそう叫ぶ……… 予測はつくだろう、あの騎士の狙いは俺だ。

あのグリフィンのスピードに加え、あの騎士のハルバートの捌き方、かなりの鍛錬を行い続けたのであろう、だが――

「早い、追いつけなくてもないか」

あの騎士は一瞬だ俺の前に現われ、ハルバートを振り下ろしてくる。このまま防がなければ俺は真つ二つになるのだろう。だが、俺の武器は決して一つではない

「なに!？」

彼の右手には細かい装飾の施されたやや長めで一回り細い剣が握られており、ハルバートを軽々と受け止めた……… 本当のことを言うとこの騎士の繰り出す攻撃はえげつなく重いため、手が痺れています。本音はこの剣が対魔獣用に作られた魔装具で衝撃の吸収をしているのと、刃が欠ける事がまったくないこの強度にとての感謝しています。『いくら早くとも実戦を積んだ経験と鍛錬でつんだ経験は圧倒的に差が出る………』

そう、実戦といっても、俺のようなモンスターのような魔獣討伐が主な傭兵の神経は常人を遥かに凌ぐ、それゆえに一瞬の事でも武器の展開ぐらゐは可能だ。いや、むしろこれが限界だろう、それにこれは魔力の廻りが元々早い奴にしかできない事で、つくづく自分の力には感謝するが、廻りが早い分体に負担が掛かる上にそう言う体質の人間は魔力の所持量が少ない上に魔力の力も弱い、そのため、俺のような体質を持つ人間は呪いに罹ったり、下手をすれば魔力暴走だつて引き起こす可能性が十分にあり、そのための補助具が必要となる。

「貴様、何者だ」

「敵にも味方にもなる傭兵……今は敵なんだろうがな！」

俺は剣でハルバートを掃い、左手の銃で騎士の腹部に向けて魔弾を放つ

「ぐっ！………」

俺の放った魔弾は鎧を貫通し、騎士を射抜く。騎士は後方へと退き、腹部を押さえる。多分後一発でも喰らえば意識を失うであろう

「へへ、あの威力でまだ耐えられるのか」

「負けるわけには逝かないんだ………ぐうう」

やはり限界のようだ。この騎士、無理をすれば死ぬ。出欠はしていないのだが、肉体的には何発もハンマーを喰らったようにダメージが逝っているはずだ。

「仲間を守るために戦うのなら死ぬな、死ねば全てが終わる」

「知った口ぶりを利くな！」

知った口ぶりか………そんな事、誰かに言われた気がするな、一人前にも満たなかった俺を一人前にまでしてくれたのは確かあいつだったかな、生意気な戦い方して、昔の俺にそっくりで、一人で粹がっ………

「必死になつて守ろうとするのは仲間の為なんだろう、だったら仲間の為に今は生きる事だけを考えろ、そうすれば何時か必ず時は来る」
そう、俺はあんな悲劇なんてもう繰り返したくない。

「お前に俺の何が分かる！！何も守れなかった俺の何が分かる！！」
あの騎士はぼろぼろと何だを流しながらそう訴え、崩れ落ちる

「スクレイド、本陣まで案内を頼む」

「おいおい、さすがに戦場で敵に背中を向けるなんてできるわけねーだろ」

「なースクレイドさんよー、本当にコイツは敵なのか？」

「はあ？」

当然の返事だろう、戦場で剣を交えて敵意を向けられもしておいて、この問いは

「傭兵は敵に友人が居ても戦場にはその感情を絶対に持ってきちゃ

いけねーんだ、ましてや恋愛感情や友情なんて言う私情は………
だが、情けはある」

「まあ、ディグルもこの状況じゃ攻撃はしないだろうし、今は一人の方がいいかも知れないな」

「どうやらスクレイドは俺の言っている事が分かったようだ……いや、大体の事は予測したのだろう。俺はそんな事を思いながら本陣へと案内された

なんだかんだで、本陣まで来た俺、なんか………スツゲー警戒されてる。

「どうやらスクレイドが前線であった事を指揮官に説明したらしく、その指揮官が俺に会いたいといったらしい

「入ってきてください」

軍用のテントから細く優しい声が聞こえ来た

「ハッ！」

俺はテントの中に入った……正直な話し、かなりビビった。

何故かといわれると、指揮官………もとい、スクレイドの話によれば姫様と言っていた。いや、絶世の美女を創造していたわけではないがな、二十歳辺りだと思っていた。………まだ幼げが残るクリームイエローの髪にスカイブルーの瞳の少女が居た。多分13、14辺りだろう。

その姫様の隣には護衛の騎士だろうか、一人だけ腰に剣を携えた若い女騎士が就いていた

「私はアニア・ネールス・ユナリア、我がユナリア国の女王を勤めさせていただいています。話はスクレイドから聞きました。このたびの加勢を心より感謝します」

まだ若いのにしっかりした子だ。まだこの子は若い、なのに女王の座に付くとは、相当の覚悟と負担………いや、俺の考えを遥かに凌ぐ困難があつた事だろう

「私の名はエルド・ディステイ、一国の長である貴女様に感謝の言葉を授かるとは恐悦至極に存じます」

俺は膝を付き、そう応える。傭兵の礼儀としては当たり前で、元の役職的にも当たり前だった気もする

「え、えっと、そんな、硬くならないでください、なんだか喋りづらいですし」

「は、はあ、分かりました」

どうやら一国の女王様は気が弱いようだ。年齢的には仕方ないとはいえ、もう少し強気に構えた方がいいのではないだろうか。

あ、シラムが起きた。シラムが俺のストールからひょこんと顔を出す

「エルドさんは……………／／／／／／」

「にゃ」

あゝ、なるほど、大体の想像はつく、多分シラムを見たのだろう

「シラム、とりあえず戻つてろ」「にゃ……………」

シラムはまた俺のストールの中に潜った

「……………はっ！す、すみません」

「こちらこそすみません。場所を考えないで出てくる気まぐれな猫です」

「え、エルドさんは、その、赤いネコさんと契約してるんですか？」

契約？……………なにそれ

「あ、いや、恥かしながら私は他の世界の者として契約とは少し違う物です」

「他の世界の方なのですか？……………ではどの世界のご出身で？」

そう、こう言う事はどの世界でも共通で他の世界の人に関しては出身地より出身の世界を聞くのが一般的、と教科書に書いてあった……

……………それと、学生時代に教科書でこんな事が書いてあったことが今でもうつすら覚えている「時限を通る際に言語、文字、次元文字などといった物が理解できるようになる」とあった気がする。それで疑問に思ったのが同世界の言語の違いなのだが、なぜか言葉は分かるし文字は分かるしでまったく問題なかった。むしろ古代文字自体皆読めていた。あゝけど、一回でも次元を越えたら全世界の言葉が

分かると言っただから随分と楽な物だ

「混の世界の出身でこの猫も元は魔獣の一種ですよ」

「魔獣ですか……魔獣ってみんなあんなにかわいい物なのですか？」

「んなわけない、んなわけない、むしろもっと怖いよ、ただシャムがあの格好でいるだけだったの」

「シャムは特殊なだけです、他はもっと凶暴ですよ……あの、姫様、話がずれているのでそろそろ戻してもらってもいいでしょうか」

「す、すみません、そうですね……エホン、この度は我がユナリア軍の加勢に感謝いたします。おかげでユナリアは守られ、壊滅は間逃れました。」

やはり壊滅寸前だったようだ、そうじゃないとあそこまで本陣の警戒が強くなるなんてありえないだろう……今思えばあの視線はかなり痛かった

「もしよろしければ少しの間だけでもいいので私たちに力を貸してくださいませんか？もちろんただとは言いません、それ相応の報酬は払います」

正直な話、戦争なんて物は嫌いだ……だが、俺は傭兵であって、雇われた限りには戦う事を余儀なくされる。奪う戦いは嫌いだ

「では姫様、貴女は何を守るために戦いますか？民ですか？威光ですか？領土ですか？それとも、自分の命ですか？」

「貴様！！姫様を愚弄するきか！！次第によつてはここで斬るぞ！」
女騎士が動いた。まあ予想をしていなかったわけでもない、信頼はあるようだ

「レキ！止めて、ここでエルドさんを斬りでもしたらスクレイドさんが黙っていないわ」

「しかし！」

「これは私が王族としての資格があるかどうかとも問われているのです」

「分かりました」

女騎士は抜きかけた剣を収め、元の位置に戻る

「さあ、姫様の答えを聞かせてもらいましょう」

「はい、私は民の為、騎士団の皆の為、国の皆を守るために戦います、守るためならこの命を投げ出す覚悟だっけあります」

面白い、面白すぎる、最強のあまちゃんだよこの姫さん……でも、それぐらいの方が使えてなんぼなんだろうな

「ははは、面白い姫様だな、自分のことすら考えないとはたいした姫様だ」

俺は思わず笑ってしまった

「そ、そうなのですか!？」

「そうですね、民の為に身を投じる王族なんて初めてですよ、ですがね、命は賭けないでください、貴女あつての民です」

あ、やばい、キャラが崩れかけてきた？

「私あつての民……ですか」

「その貴女を守るのは部下であり、民でもあります……ですから、しばしの間その民の一人として貴女様を守らせていただきます」

俺は膝をつき、この方にしばしの間のみ雇い主になっていただく事を決断した

「ありがとうございます!!」

彼女はバツと座席から立ち上がり、ぺこりと頭を下げて言う

「勘違いしないでくださいね、し・ば・し・の間ですので何時までもと言うわけではありませんでの」

「少しの間協力してくれるのなら構いません」

後悔はしなかった……俺の発言には少し無責任すぎる部分もある。だが、それは何時もの事であり、傭兵としては当然の事で、無責任だった。

傭兵は忠誠を誓う騎士とは違い、金で動き、金で敵味方が変わる。だとすればできるだけこの方には傭兵と言うものを信じてはいけななものだと知ってもらいたい、俺はいずれこの軍を去る、そして運

が悪ければこの軍を敵に回すときが来るのだろっ、そうなった時に
なんらかの関係ができていれば戦う事もさぞ辛かるっ。

人との関係は何時か悲劇を招く、だからそんな悲劇を招かないため
にも人との関係は創らないほっがお互いの為だ。

今ここで俺の新たな物語が始まるのだろっ……だが、それと共にま
た辛い思いはしたくもないしさせたくもない、そう思っのだった

第四話 竜霸王の騎士は皆の為に自分を捨てた

……俺は負けた

そもその始まりは俺の無力が生んだ結果なのだろう……

時は戻り、魔族国バルマスの運命をかけた一戦、バルマスの最後の砦である、難攻不落の最強の城、魔城レリポマスでの一戦のことだった

その時、俺は城の祭壇で魔城自体に張られた結界にさらに龍の結界を張っていた。

俺は内心、負けるはずがないと思っていた。

俺には封印された状態ではあるが、五千もの竜が身の内にある。それがどんな意味を指すのかというと龍の邪気が常に俺の体から魅し出して居るという事。そして今はその邪気を祭壇を通して城の結界を覆うかのように張られていて、上級の精霊でも破れない結界を張っているの状态にあつた。

俺の邪気は鉄をも消滅さし、魔剣の一撃をも打ち消すほどの物で、邪気の発生源の俺を倒さない限り、結界を破ることはできなかった。それはそうと、この戦いが始まる数日前にとある女軍師が現われた。名前はなんと言ったのだろうか、あまり覚えていない、だがその女軍師は少なからずの手勢を率いていた。それはこの状況下ではかなりありがたい事で、向かい入れざるおえなかった。余談となるがこの魔族国では歩兵というよりも、グリフィンに跨り、空を翔け、空中から攻める、魔天獣騎士が主で歩兵は姫様の親衛隊のみだった気がする。そんな俺も魔天獣騎士の筆頭を務める騎士だった。まあ話を戻すと、その軍師はこの戦いで俺に祭壇で結界を張れはと勧めた。それ自体は何の問題もなかったのだが、その後が気になった。魔天獣騎士は外の守備という事は分かるが、親衛隊が姫様の下を離れ、前線に加われといいやがった、そして姫様の守備はその軍師がすると言った。親衛隊長である天神風華はもちろんの事反対した……

…当たり前前の事だろう、彼女は姫様に恩がある、それは今から十年ほど前だったろうか、まだ姫様が幼かった頃の事だ、確かあれは城付近の森だったかな、姫様は俺を含む数人の部下を連れてグリフィンの好む蜂のミツを取りに行った事だった、たしかあれはその帰りの事だった、何処からか変な声が聞こえてきて皆がそれを不審に思いそこら中を探し回って、一人の部下が見つけたんだ、そこには変わった服装をした当時の姫様とさほど変わらない歳の女の子が居てさ、その子がわんわん泣いてて姫様が「どこから来たの」って聞いたらその子が「お外の世界」って答えるから驚いたよ、まさかこんな小さな女の子が次元の扉を通ってくるなんて考えもしなかったんだから、そこで姫様がその子連れて帰るなんて言うから部下はもちろん俺も驚いたよ、その女の子は天神風華っていう名前で姫様と姉妹のような仲で今までずっと過ごしてきた。

戦い直前の軍議で姫様は風華に「私は大丈夫よ！だから風華、騎士団の人達とバルマスの皆を守ってきて」って言ってさ、風華は断るわけにも行かず前線に出たって事、そして姫様の守備はその女軍師が就いた。

本当のことを言うとかかなり不服だ。それにあの女軍師、何を考えられているのか全く分からない、怪しい、怪しすぎる、いつその事殺せば事は済むだろう。

あの軍師の考えはたしかに一理あるが、どうも今回の戦いに関しては俺たちに対しては避けるように兵の配置をしている。

まさか！……………嵌められた…完全に嵌められた……………あの女軍師、俺の感が正しければ帝国のできる軍師だ！じゃなければ姫様の守備以外においてあんなに納得がいくほどの兵の配置をするわけがない！だとすれば今ここに俺が居ること事態が畏だ、俺がここから離れれば結界が破れ、5分もしないうちにしる事態の結界が離れる、しかも結界が破れ、敵が侵入してきて白兵戦となり、兵力が圧倒的に少ない魔族国が負けるだろう……………もちろんの事だが俺が参戦したところで魔力の消耗している俺は戦力としてはまともに戦える事はない

だろう

「魔王よ、我に眠る竜を従えたと言う魔王よ、皆を守護されたまえ」
遙か昔、この国はかつて聖帝王ユナリア国と呼ばれたユナリア国と並ぶ二代精霊国だった。その頃に存在したと国歴に記される魔王、その魔王は今俺の身の内に眠る五千の竜を従えらといわれている。この竜達は俺の意思では扱えも呼び出しもできない、ましてや竜の方も出てこれもしない、この眠りを覚ませるのは魔王のみといわれている。その魔王は不老不死と称され、今もどこかで生き残っているだろう。

俺には精霊使いと違い、魔物や聖霊と言った精霊類のものは契約のできない、べつにその素質が無い訳ではない、というよりも、俺は代々竜を身の内に宿してきた由緒ある魔王に仕えた一の部下、俺の先祖は大賢者と言われた精霊使いだった。国歴によると、その大賢者も一体の竜と契約していたらしいのだが、魔王の従えた竜を大賢者に封じるときに、大賢者の竜が魔王の竜全てを押さえ込み、鍵を掛けた様な状態にしたと言う。大賢者の竜には話しかけても返事ないと言うということが代々言い伝えられているが、本当の事で力を「借りてもいいか？」と竜に問うと何も言わず竜の加護を授けてくれた。俺の先祖もそうやって戦ってきたらしい。

「魔王よ、この戦いを見ているのなら我々を勝利に導きたまえ」
彼は祭壇でそう祈りを捧げ、そして竜の加護を祭壇から城へ城から城下町へ、そして地面と通り城壁へと巡らせ、そして城壁の外に張られた結界の先まで魔力を流し魔城レリポマス全てを包み込む竜の結界を張り続ける。彼は黄金の覇気に包まれ、殺気どころか不安さえ吹き飛ばすような温かみを感じる。

……あの軍師、何をしようとしている……いくらなんでも姫様一人とはいえ、姫様は魔王が作ったと言われる数少ない魔剣の内の一つにして最高傑作とまで言われた覇剣ダークロードを受け継ぐ方だぞ、姫様が戦えなくとも覇剣が黙っては居ないだろう。

そう、魔王は今までに計18本の魔剣を作ったと言われている。魔

剣は精霊のように契約を交わし、契約主だけに付き従う忠実な物であり、何より繊細で高貴な物である。魔剣には意思があり、自分の認めた者のみに膝を付き、忠誠を誓う者であり、契約主の血にも忠実で受け継がれる場合が多い、そして姫様も代々受け継がれてきた魔剣の契約者だ。姫様は魔剣を見た事も操った事もないが、会話はしたと言っておられた。だから魔剣は願えば真の姿の古代魔族騎士の姿を現し契約者をお守りくださるだろう……

今思えば他の魔剣はどこに消えたのだろう、魔王が姿を消すときには魔剣の内一つを所持していたと聞いている、だとすれば、残りの16本はどこいったんだ？国歴書には何も書いていなかったし、封印されたとは……あ、封印の森！確かあそこには炎剣が封印されていたと聞いたことがある。じゃあ15本は？

彼は祭壇ですつとそんな事を考えていた。

——と、その時の事だった。

いきなり体に力が入らなくなったような気がした。

「あゝ、まさかとは思うけど、魔消石？……解説しよう、魔消石とは」

魔消石とはその名の通り魔力を奪う石の事で、ここ最近はこの魔城の宝物庫にしか置いていないとても貴重な石で、魔族国の国民にとつてはまさに弱点中の弱点……つまり、大ピンチ？

「あーでも、何で俺だけ無事な訳？これも竜の加護ですか？」

彼はまさかとは思ひ、ポケットから小さな魔法陣の書かれた紙を取り出す

「我が名の元において映したまえ」

彼はそう唱えると紙は彼の手元から燃えるように消え、足元の床に小さく城の外の風景が映し出された

「……皆」

その映し出された風景は魔族国騎士の皆が倒れていた。彼にとっては見るのも辛く、なんと悲しい風景だった。だとすればなぜこの祭壇だけが無事なのかと言うと、他の場所とは違い、ここは俺に眠

る竜の加護がいつそう濃い場所だ……いわば魔力の塊と言えるだろう
「いや、影響が無い訳でもないか」

長く結界を張り続けた結果なのだろう、後数分もすれば魔力に限界が来る、何だかんだで2時間以上は結界を張っているのだ、無理もない話だ……だが、魔力が切れると言う事は魔消石に影響されな
いと言う事なのだが、生命力が持たない、魔力を使い切った時点で
普通は深い眠りに付くだろう。

「随分とこの祭壇は楽な場所ですね」

どちら様？いきなり祭壇のドアが開いた

「これはこれは帝国の女軍師さんじゃありませんか、魔消石を使つ
たまではよかったものの自分にまでその力が及ぶとは思わなかった
でしょう」

このに入ってきたのはあの女軍師だ

「ほんとよね、あの事については驚いたわ……で、よく気が付
いたわね」

どうやらこの女軍師は大きな誤算をしていたらしい

「さて、俺を殺す？それとも結界を解けとでも？」

「そうね、殺すのもいいけどボガル様から殺すなと言われている
のよね」

殺さず生け捕りにか………気に入らないな

「さて、そろそろ魔消石の力を止めた方がいいぜ」

「なぜ？ここは貴女の魔力で守られている場所なんですよ、だつた
ら止める必要はないでしょ？」

呆れた。コイツ、軍師じゃないと思います。

「さーて問題です。俺は一体どのくらいの間魔力を使い続けている
でしょうーか」

その瞬間、パ——ン！！と音がして、俺は一気に魔力で結界を張
るのを止めて自分自身の魔力のめぐりを加速させる。魔力のめぐり
を加速させる事により身体能力の飛躍的向上と魔力生産、回復を行
う事ができ、さらには加速のリスクとして微量だが魔力が漏れるも

の、それをうまく自分の魔力で拾い上げ、扱う事により魔消石とまではいかないが剣を受け止める事ができるほどに自衛の結界が張れる。

「あぐうう、貴様何を、無茶なことを！」

魔消石は魔力持つ者全員にその効果が有り……あ、いや、俺が知る限り一人だけその効果が効かなかった覚えがあります。

「さてと……逃げろ！」

俺は女軍師を蹴っ飛ばし、魔消石の効力が止められる前に姫様の元へと向かった。

「ぐあああ！」

あの女軍師が魔消石の効果を受けている今だこそできる物の、普通なら避けられていただろう、あの女軍師をどうにかした所で現状が変わるわけではない、寧ろ悪化したと言えるだろう。

「間に合ってくれ」

そう、結界が解けた事によって残るのは城の結界のみで帝国軍が侵入してくる事は時間の問題なのに踏まえ、姫様が帝国兵に囲まれている事は確かなのだろう……

さて、俺は急いで姫様の下へと走る訳なのだが、一つ問題がある。それは俺が何時まで魔力の加速を行い続けるかだ、魔力の加速は便利な物で、魔力の回復や身体能力の飛躍的上昇があるがそのリスクとして長時間使い続ければ体に大きな負担が掛かり体力の消耗が激しく、持っても30分が限界なのだろう。

祭壇を出て姫様の居られる謁見までは魔力の加速を使って走っても約2、3分ほど、なんせ祭壇はこの城の最北部の塔にあり、俺は祭壇から出て、塔の一柄に階段がある螺旋階段の真ん中の何もない空洞の部分に飛び降りてスタッと軽々と着地し姫様の下に向かう

「間に合って——」

刹那、いきなりバリ——ン！！！！と途轍もなくいやな気がした。

「いくらなんでも早すぎる！！！！」

そう、今の音は難攻不落の魔城レリポマスの結界が破られた音だった。だが、それと同時に魔消石の力が解けた……あの女軍師はこのことに気が付いたらしい

「どうすりゃぁいいんだよ……！」

こうなる事によって、姫様と騎士団の皆が天秤に掛けられた。これは俺にとつて片方しか選べない選択で、決して両方を救うのは俺だけじゃあ無理な話だった。

「いや待てよ、魔消石に干渉されない彼女なら今頃は姫様を……なら俺は戦場に行くまでだ！」

彼はあることを思い出し、戦場に向かう……

「イプト！」「クエー！」

俺は城の中庭に出て愛騎グリフィンのイプトを呼ぶ、そうすると何所からともなく、白と黒の混合羽を持つグリフィンが姿を現した

「イプト！皆を助けに行くぞ！」「クエー！」

彼は愛騎イプトに跨り、イプトはその大きな翼を羽ばたかせて空を舞った。

空から見ると良く戦況が分かった。

「劣勢……当たり前か」

彼はイプトに跨り、魔装具の指輪からハルバードを具現化させ、ハルバードを構え、竜の加護を発動させイプトと共に覇気を纏う。

「魔族国天魔獣騎士団筆頭騎士ディグル・モラール！竜霸王の肩書きは伊達じゃないって所を見せてやるよ！いざ……押して参る！」

彼は騎士の皆の下へと向かう

「誇り高き魔族国の騎士達よ！今こそ我々の力を示せ！」

彼はいきなり戦場に現われた。それは誰もが予想をなかったのだろつ。

「デイグル様!!」

一人の魔天獣騎士が寄って来た

「風華は行ったか」

「はい、あの方は我々が動けない間に姫様の下へ向かわれました」

やはりそうだったか、風華は何故か魔消石の影響を受けず、何故か動き回る事ができるのである……なんだろう

「そうか、ならば! 思いっきり戦う事ができるな、行くぞ!!」

「はっ!!」

彼は戦場に突っ込んでゆく

「はあああああ!!」

ズバーン! 彼はイプトから飛び降りて敵兵に突っ込み、彼はハルバードに竜の加護を纏わせ敵をなぎ倒す

「ここから先は一兵たりとも通すな!」

彼は兵の士気を上げてさらに敵をなぎ倒す。この先は本当に通す訳にも行かない場所で第一の門が破られたと言う事は次は城下町に続く第二の門があり、あそこを破らせるわけにも行かないのだ。

「ほう、テメエが噂のデイグル・モラルか」「!」

やや長めの黒い髪をした黒と白の塗装が施された鎧に帝国の紋章が刻まれた騎士がいきなり現われ、電気を帯びた剣で斬りかかって来た
「ぐううう」

俺は咄嗟に反応し、その騎士の剣を受け止める

「俺は帝国三大魔将のデガル・ゼナートだ」

「へー、デガル・ゼナートと言えば雷狼で有名じゃないの」

「テメエのような誇り高い騎士に知ってもらえているのは光栄だな
「!」

彼と魔将の鏖迫り合いが続く、竜の加護を使っているにも覇気が伝わってくる

「ていやああああ!」

彼は魔将を力づくで振り払う………だが
「ガアアアアアアア!!!!」

違う方向からの事だった、彼は決して予想だにしなかったのだろう、竜らしき咆哮が聞こえてふと振り向くと、いきなり鎌を持ち、赤と金の鎧を纏った騎士が紅い竜に跨り斬りかかって来たのだ。

「くっ！」

「始めましてだな！竜霸王！」

俺は咄嗟に体を動かし、後方へと下がり、敵の攻撃を避ける

「火竜！」

「おお！知っていたか！我は帝国三大魔将ボガルド・ヴァイツ！」

「帝国の総帥が何でこんな所に居る！」

この騎士はボガルド・ヴァイツ、帝国の総帥にして最強の騎士、火竜と呼ばれる異名を持ち、奴と戦った者で勝った者は居ないと聞く
「王国は弱くてな！魔族国に行けば大物がいると聞きここに攻めてきた！」

ひでー理由だ。こいつ、何が目的他だ！？

「大物つてのは誰の事だろうな！生憎今ここには魔王は不在なもん
でね」

「ならしかたない、竜霸王で我慢するのでしょうか」

「ちよつと待って下さいよ総帥、ソイツは俺が見つけた獲物だぜ」
割って入って来たのはあの雷狼だった。

「残念だがこの獲物は意地でも捕縛する」

うそだろ！？捕縛！？

「それなら総帥、どっちが早く仕留めれるか勝負と行きましようか
！！」

雷狼は電気を帯びた剣を振り下ろし、稲妻の斬撃を繰り出してきた。

「その勝負乗った！！」

火竜のほうは鎌を振り上げる、そして竜のは咆哮と共に炎を吐き、火竜は赤い斬撃を繰り出す。

「全軍！退けー！周囲の敵は無視して第二の門を死守しろ！」

彼は咄嗟に竜の加護を周囲に展開し、そう叫ぶと魔族兵は今戦っている兵のみを蹴散らし、周囲を警戒しつつ第二の門まで下がってゆ

く。

彼は帝国の魔将二人の斬撃を竜の加護で張った結界で何とか防ぐが、斬撃の衝突による爆風と煙が上がる

「だったらこれはどうだ？」

声は火竜の方からした。彼の脳裏には嫌なものもが過ぎった。

そう、それは概ね当たっていた。また竜の咆哮が聞こえ、斬撃は第二の門まで下がる魔族兵に飛ばされていた。

「間に合え！」

彼は自分に張った竜の加護の結界を解き、魔族兵の方に瞬間的に竜の加護を展開して見せた。

「馬鹿め、から空きだぞ！」

斬りかかって来たのは雷狼、竜の加護に意識を集中している俺は無防備で、ハルバードで何とか受け止めるものの、俺ごと弾き飛ばされる。

「ぐはっ！」

後ろに飛ばされて、強く背中を打ち付ける。鎧のお陰で骨は折れなかったものの、今は痛かった。

「デイグル様！」

兵が俺を呼ぶ、だが結界を張った状態なのであちらからはここに来る事はできない。

「はぁ……はぁ……はぁ、はぁ」

体力の限界だ、さっき打ち付けられたときにハッキリと分かった。いや、今までののはただの執念だったのだろう、竜の加護は魔力と体力の両方を消耗する。それに俺は魔力の加速を使った事によって体力は限界に達していたのだろう……

「ふらふらじゃねーか、諦めろよ！」

火竜が俺に迫りながらそう言う

「バカ言つなよ、諦めでもしたら竜霸王の名が廃るじゃねーか」
彼はハルバードを杖代わりにフラフラと立ち上がった

「その覚悟やよし！それでこそ騎士だ！我は氣に入ったぞ！」

「変な事言つなよ、アンタに気に入られたところで何にも嬉しくないよ」

彼はハルバードを回転させてバツと止めて構える。

「今からでも遅くは無い、我が配下に収まれ、さすれば貴様が思う皆を救つてやる」

「また考えておくよ!」

彼は火竜に攻撃を仕掛けようとした瞬間!

「デイグル! もう止めて!!」

彼は思わず足を止めてふと振り返る。そうすると目に入っただのは第二の城壁に立つリニカ・エア・バルマス、彼の仕える主その人だった。

「我々、魔族国バルマスはギニマドラ帝国に降伏します」

彼女はそう告げる。すると彼には強い衝撃が頭を駆け巡った

「ま、待つて下さい姫様! まだ負けていません!」

「デイグル、結界を解いて」

「し、しかし!」

「デイグル・モラル! 結界を解きなさい!」

「逢瀬のままに」

彼はハルバードを魔装具に戻し、結界を解くと何かに開放されたのか気を失った

その後、リニカ・エア・バルマスは「私が人質になりますから皆には手を出さないでください」と要求したらしいが、火竜のボガルド・ヴァイツはそれを拒否し、デイグルに「我が配下に加われれば貴様の姫は勿論、騎士団にも民にも手を出さないと約束しよう」と言われ、彼はその申し出に答え、帝国の配下に加わりった。それにより、姫様と風華は城で捕虜として、騎士団は武装解除し城下町に帰された。帝国軍は魔城レリポマスに納められている魔消石の所有権を得た。

そのことにより、魔族国は反乱を起こす事ができなくなった。

この魔城陥落の戦いで彼の新たな幕は上がった。

第四話 竜霸王の騎士は皆の為に自分を捨てた（後書き）

如何でしたでしょうか、正直な話、サブタイトルで誰視点かが分かるので見てみてください！

これでとりあえず第一章が終了です。

読んでくれた事に感謝感謝です！！

誤字があつたら教えてください！

アイツ、こんなもの作ってたんだ by グラム・ブレイズ

お久しぶりです、次元王といえれば分かってもらえるかな、今回は次元王であるこのグラム・ブレイズのお話を聞いてもらえるとありがたい。

これは大昔の話だ。

二代精霊国を覚えているか？そう、今のユナリアとバルマスの事だ。初代魔王、バルマスに居た不老不死の魔王だ、その魔王が作った魔剣の話だ。

一つ目は覇剣ダークロード、あの剣は二つ目の聖剣ライトナーガと並ぶ双子の剣だった、聖剣は魔王が居なくなる少し前にユナリアに譲られ、覇剣は次期魔王に譲った、彼は後の両国の安定を願った、そう記されている書物が多いが、本当は来るべき危機に備えてだと聞く。

三つ目は炎剣テオダーナ、魔剣の中で最も破壊に優れていたと聞く、だがその魔剣は自身の炎を恐れ、主にはその炎と同等の力を持つ打ち消す者が欲しいと……そして魔王は封じた、相殺の力を持つものを……

四つ目は死剣ダイダロス、この魔剣は謎に満ちており、魔王はこの剣についてもこの剣の行方についても、示しておらず、今の歴史では名前を見つけるのがやっとだったと言う。

五つ目は黒刀アブテロス、片刃の黒い炎を放つ剣、そう記されており、護の世界の武器を真似て作ったと記されている、今から数年前、何処かの世界に封印されていたらしいが、いつの間にか無くなってしまったらしい。

六つ目以降の魔剣については記されておらず、魔王の書にはこう書かれていた。

【時 満ちる時 訪れよう】

【黒き剣は牙を向き 剣と 者と共に を救う】

【死を れぬ者が び来る】

擦り切れて途切れ途切れの書物、恐らく、これはただの予言ではない、歴史を変えるものなのだろう。

黒き剣は黒刀、その剣が誰に牙を向けるかは分からない、だがこれは暫しの時間がたてば分かる事なのかも知れない。

以上、次元図書館、歴史資料室からでした。

主人公たちの詳細

あまがみひょうぎ

天神氷義

年齢：16歳

身長：166センチ

体重：49キロ

髪型・髪の色：ショートヘアーで右の前髪が銀色、それ以外が薄い青

詳細：ルックスは上の中、性格はかなり慎重派で決断にやや時間が掛かる。主人公の中では最も強い武器を所持しているのに腕前は実戦経験が浅いせいかもしれない、テオダーナの扱いも魔力的にも使いこなせず今のところは最弱と言ってもいい。なぜテオダーナと契約できたかと言うとテオダーナ自身が戦う機会が無く、魔力の乱れなどで全力が出し切れなかったのが原因である。氷牙の扱いは手馴れているせいか技を組み合わせて連続で放つのが得意であるのだが、複数戦闘になると戦うのがとても苦しい状況になる。だが彼はユナリア防衛戦に参加するまでその事を知る由も無かった。

エルド・デイスティ

年齢：21歳

身長：175センチ

体重：48キロ

髪型・髪の色：実際は肩より少し下まである黒髪なのだがなぜかバングナをしていると髪が縮んだかのようになる、本人は縮んだと言っているが本当のことは分からない。

詳細：ルックスは中の上、実を言うところ一番嫌っているのは自分自身で、いつ自分が自分でなくなるのか不安に思っている。彼は数年前から呪いに侵されていてそれを証拠に彼の背中には見るのも苦しい青紫色の毒が侵食している、だがそれは彼にとっては魔力への干渉

でもあり多少は魔力の上限が増した物の、魔力の暴走が頻繁に起こるため、常にバンダナをつけている。彼は主人公の中では最も強いがそれと共に最も人間関係を作ろうとしないのにお節介で他人のことばかりを考えている。

ディグル・モラル

年齢：19歳

身長：172センチ

体重：52キロ

髪型・髪の色：茶色のショートヘア、本音はロングヘアにした
いのだが、鎧などを纏っていると髪が短い方がいいという理由で
ショートヘアにしている。

詳細：ルックスは上の中、ハルバードを扱い、魔天獣騎士の筆頭にして竜霸王と呼ばれる大賢者の末裔にして五千の竜を身の内に封じる人物、主人公の中では統率力に優れており、何時も前線に立つて仲間を護ってきた。彼は後のバルマス解放戦で誇りを取り戻す。彼は護るのが主で攻撃法方は他の主人公と比べ、近接攻撃がなく、氷義の様にこれと言った技が使えないので戦いでは竜の加護で境界を張ったり、魔力の加速で一気に敵との間隔を狭め、場合によっては一振りで山をも削ることが出来る精霊が作り出したハルバードで敵を奇襲する。

主人公たちの詳細（後書き）

なんかエルドだけがルックス低いな
そう思った人はルックスに自身はありますか？

第五話 魔弾の傭兵と希望のお姫様

この世界に来て一日にも満たない、俺がユナリア国と言われる所に雇われ、現在はその日の夜……………打ち上げをしていた。

明日には城に帰るらしい、どうやら今日の戦いは敵の進軍速度を考えて少しでも足止めをしておきたかったらしく戦ったものの、窮地に立たされかけたということだった。

聞く話によると久しぶりの勝利だったらしく、騎士団の人間や親衛隊の人たちはもちろんのこと姫様も大喜びだった。

そんな訳であつちの方では宴会をしているようだ。

俺は宴会そつちのけで陣の張った場所から少し外れた場所で木に背中を預けて座り込んで美しい夜空を見上げていた。

「こんなに寒いのに星空は綺麗でなによりだ」

木のような色をした自分の魔力の結晶を繊維と一緒に編みこんだマントに身を包み、首から肩にかけて長く作った俺自慢のお手製ストールを巻き、白く冷たい息を吐き、空を見上げてボソツと呟く

「ストールよりマフラーの方がいいかな？」

基本的にはマントやストール、革手袋には自分の魔力を張り巡らして防具とすることが多く、お手製ものが多いのはそれが原因だ。

「ニャー」

ストールの中から手の平に乗るぐらいの小さな小さな赤い毛並みの子猫が顔を出す。この猫の名前はシャム、彼の持つ魔装具に封じられたモンスターの一匹、彼が所有するモンスターは全部で四体、その内の一体がこのシャムだ。見た目は猫なのだが、それは彼自身が力を抑えているからで本来の姿になることが出来たない、だがその力は十分なほどに発揮され、戦場ではかなり目立つだろう。シャムの本来の姿は紅蓮の炎を身に纏う獅子で、その姿の一手手前までの姿にならるのだが、シャム自身がこの姿に好んでなっている。なぜか小さな姿だとエルドが魔力を注ぎ込まなくても動く程度なら

勝手に出てくる事ができる。

「シャムか……………ちょうどいい、皆も外に出すか」

そう言い、エルドは首にスツと手を当てて手を横にスーッと動かす。すると彼の周りには人の3倍はあるかと言う灰色の鎧を纏った黒いガーゴイルと銀色美しい羽を羽ばたかせる鷲のような姿をした巨大な鳥と青く硬そうに尖った毛と柔らかくしなった黄色の毛が少し入った毛並みと堅く尖った爪先にそれに似合う肘までにかけて甲殻がある頼もしい腕をもつ熊のような獣がエルドを囲うように現われる。「こつやつて皆で夜空を見るのつて久しぶりな気がするよ」

俺は優しい声でそう言う……………

「にゃ〜」

シャムは俺のストールから抜け出し、俺と三体の真ん中にチヨコンと座り、尻尾の先に小さな炎が灯される。

『そうだな、全員が出るのは大概が戦いの時だけだな』

低く重なったような声がガーゴイルから聞こえる。コイツの名はレト、四体の中ではもっとも誇り高く忠実でこの中で唯一人の言葉が話せる奴だ。喋り方はあまり忠誠を誓っていると思えないが命令には絶対に従う。今の姿は灰色の鎧だが、本来の姿は黄金の鎧を纏った漆黒の竜魔神……………レトは戦場で巨大な槍を振るうものの、その槍は質素な物で、かつての魔槍シク・ロマレスを振るい世界を恐怖に陥れた竜魔神の生き残りとは到底思えない。だが、『この姿も悪くない』と奴自身も言っており、現在ではアタッカーとして機能している。

「グワアア……………グウグウ……………」

鷲の姿をしていて、今羽をたたみ即行で寝に入っただのはバレルグ、普段は白い羽なのだが、月の光に当たると羽が銀色に輝くのが特徴的な所だ。コイツはシャム以上の気分屋で空を飛び回る事が一番好きで旅の移動手段によく利用するが移動先はバレルグにまかせることが多い。コイツの本来の姿は氷王鳥と言われる風と氷の力を持った冷気を風と共に体に纏い続ける白銀の鷲なのだが、今ではただの

鳥だ。

「ガルルル」

熊のコイツはメレット、見た目的にもっとも目立つのはコイツなのだが、四体の中ではもっとも弱い奴だと思う。地上戦ではそれなりに戦えるのだが、かつては使えたはずの雷の力が使えなくなり黄色い毛並みも撓って来ている。本来の姿は雷鬼獣と言われる雷を体に蓄える力を持っていたが今となってはその力が使えるかも怪しいぐらいまで来ている。

この四体にはそれぞれ出会いがあったがそれはまた後ほどにしよう。

「ん？メレット、どうした？」

「（がたがたがたがたがたがたが）」

メレットが体を震わせて丸くなる。

「ごめんごめん」

俺はメレットにスツと触れる。

するとポンツと音がしてメレットもシャムのように手のひらサイズになった。

俺がメレットを肩に乗せと、メレットは勝手にストールの中に入っていた。

『相変わらずお前はお人よしだな』

「お前も温まるか？」

『いや、魔装具の姿でも十分だ』

レトはそう言うと言子となって消え、首にかけられたネックレスに通された状態で指輪に戻った。メレットは方で丸くなっている。

「ニヤ、ニヤ」

シャムが尻尾をゆっくり振りながらやさしい鳴き声を挙げて歌う。

「はいはい、分かったよ」

俺は何時ものアレをシャムに要望され、ポケットから一つの指輪を取り出す。

「ったく、こんな寒い中ギターを弾かされる身も考えてくれ」

俺が取り出したのはギター、それも普通のギターではなく、魔力を

込めて弾かないと音が出ない特殊なギターで使い方次第では戦闘にだって使える代物だ。

彼のギターからは優しく、安らぎを与えるような音色が奏でられる。

「グワァ……グワァ……グワァ……」

「にゃ〜……にゃあ……にゃあ……」

「ガルウ……がるう……ぐう……」

レトを除く三匹が寝始めた。これを弾き始めると何時もこうだ。

『……………ぐう』

お前も寝るんかい！　そう思う俺であつた。

「……………取り合えず戻つてろ」

俺はカンテラを取り出し、シャムを掴んで火を点けた後、三匹を戻した。

「あれでも超高位のモンスターなんだもんな」

今考えてみるとあいつ等とはそれぞれの出会いがあつて色んな形の絆があつた気がする。

少し強い風が通り抜け、辺りの茂みがザザーと音を鳴れながら揺れからだが少し寒い。

「あ！　エルドさん！　ここに居たんですか！」

俺は少し驚いた。なんと、草むらを抜けてアニア・ネールス・ユナリア、その人がやって来たのだ。

「ひ、姫様！？」

「そんなに驚く事ですか？」

彼女は俺の隣に座つた。

「そりやまあ、一国の主が宴ではなくなんな場所に居るなんて予測もしてませんし」

「それは……そうかもしれないけど」

彼女はあつさりうなずいた。

「それで？　姫様は何でこんな所に？」

「今日の戦いはエルドさんが居たからこそ勝てたんです、なのにその主役が祝いの席に居ないのは一国の王として見過ごせないだけで

す」

少し……いや、この姫様は大きな間違いをしているようだ。

「姫様、俺は国立ギルドの者じゃない、一言で言えばただの兵士、もしくはそれ以下、雇われただけの人間、そんな奴は祝いの席じゃなくて外で見張ってる方がよっぽどいいんですよ」

「国立ギルド？」

おや、国の王とあるう人が……いや、ここは世界が違うのか。

「知りませんか？国単位が作るギルドの事」

「お父様の代はそう言うものがあつた気がします」

どうやらこの世界でもそれに近いものがあるらしい、近しいと言うのにはあつちの世界とこの世界では絶対に全てが同じと言つけないからだ。

「つまり俺はただ雇われただけ、国との正式な契約で結ばれたギルドとは違う上にギルドにも所属していないフリーの傭兵なんですよ」
「それだつたらエルドさんもギルドを創つたらいいじゃないですか」
あはは、そんなことが簡単に出来るのなら教えて欲しい。

「姫様、ギルドと言うのはそう簡単に創れるものじゃないんですよ」
俺はあははと笑いながら言った。ギルドを作る為にはギルド拠点とギルドメンバーの確保、そして依頼が申し込まれてくるようにそれなりの信頼とそれ相応の知名度が必要となる。

「それだつたらこのユナリアが国立ギルドを創ります！」

彼女はポンと自分の胸を叩いて自慢げに言う。この先大丈夫なんだろうか。

「姫様、国立ギルドの規則は知ってますか？」

念のためだ、聞いておく方がいいだろう……

「知りません！」

あつさり、ばつさり言われてしまった。

「姫様、俺の居た世界で言わせていただきますと国立ギルドは設立までが国負担ですよ、小規模だとしても国にそこまでの余裕がありますか？」

小規模なギルドでも結構な金額が消えていく、しかもユナリアは戦争中のため、そんな余裕はないだろう。

募兵に兵糧、それだけでも金は使う。

「それじゃあ、戦いが終わってからなら断る理由がないですよね。」
確かにそう言われれば断る理由はない。

「……………分かりました、どうせこの戦いが終わった所でいく宛てもありませんし、それに……………いえ、何でもないです」

俺がそう言っていると彼女は少し顔を傾げた。

「もったいぶらないでくださいよ、気になるじゃないですか」

「……………3ヶ月前に仲間と次元の扉のせいで離れ離れになったきりなんですよ」

少しの沈黙後、俺はあの事を打ち明けた。黙っていても何もなら無い事だ。

「そんな事が……………すみません、嫌でしたよね」

「気にしないでください、どうせあいつらの事ですから戦場でバツタリ再会なんて事があると思いますし」

モンスターを狩って来た俺は今までに似たような事がなんどもあった。

「でも、その時って……………」

「傭兵なんて雇い主に不満を持てば何時でも裏切る生き物ですよ、少なくとも俺が雇い主に求めるのは金以外のものですけど」

前もって言うておくが、決して「金より戦いを求める！」とか言うバトルマニアじゃない、雇い主に正義があるかどうかだ、悪意のある雇い主はいつか破滅する、雇われている奴を含めてな。

「それじゃあ……………エルドさんは困っている方に同情して加勢するんですか？」

ガクッ俺は少し傷ついた。

「違いますよ、一言で言えば義がある……………正義があるほうに加勢するっていうことかな」

「そう言うものなんですか？」

「いう言つもので「ニヤー」……シヤム、セリフの途中割り込まないでくれ」

ストールの中からはシヤムがひよっこり顔を出した。

「ノノノノか、かわいいノノノノ……クシユンツ！」

彼女の顔が赤くなると同時にくしゃみが出た。

「体は温めておいたほうがいいですよ」

俺はポケットから一つの指輪を取り出し、発動させる、するとマントが俺の手に握られ、そのマントを彼女にかけた。

「ありがとうございます、暖かいですね」

「シヤムの魔力の性質ですよ」

「ニヤーニヤー」

とは言え、コイツを可愛いだけといったら怒りそうだが、一応コイツは最強ランクの一種だというのに……

「へー、シヤムが今日知り合ったばかりの人にこうまで機嫌よく接しているのは初めてだな」

「そうなんですか？」

「基本は懐かない奴ですよ、ですがそのマントはいまシヤムの魔力で温められている、それが何よりの証拠です、姫様はかなり人徳に溢れているでしょう」

彼女が今羽織っているマントはシヤムの魔力で紡いだマント、火に優れ、火をつけても燃えない、それに心を許す者のみに心の安らぎを与えるお手製マントだ。

「ニヤーニヤー」

シヤムは彼女に寄り添い、体を丸める。

「紅蓮の獅子がこんなにも俺以外に心を許すなんて……シヤムは姫様に何かを感じたのかも知れませんか」

「私に、ですか？」

「そう、紅蓮の獅子の炎は破壊を意味すると共に希望を意味するんですよ、その加護を受けると言う事は姫様には希望が残されているということですよ」

「本当に……そうなのでしょうか」

そうか、今までに悲しい事や辛い事は彼女なりに経験し、学んできたはずだ、深いことは聞かないのが礼儀と言うもの、戦局がここまですぐ悪くなると自分を追い込む事はあるだろう。

「過去は語らずとも今は時が語る、誰も責めたりはしないでしよう、姫様は自分なりの考えを皆に伝えればいいだけだと思いますよ」

「はい、ありがとうございます」

「……そうだ、姫様にこれを」

俺は特製次元皮袋の中からロザリオを取り出し、姫様に渡す。

「綺麗なロザリオですね」

「その魔装具は少し特殊な物でして、お恥ずかしいのですが、呪いのせいかどうかとも扱えなくて」

彼女はその言葉を不思議に思い、魔力を流し込んでみる。

ロザリオからは白い光りが輝く。

「どうやら姫様には従うようですね」

ロザリオは姿を変え、白い毛並みのとても小さなリスとなった。

「エルドさん、この子の名前は？」

「ないですよ、姫様の子なんですから名前ぐらい付けてやったらどうです？」

「名前ですか……シノと言うのはどうですか？」

リスは嬉しそうに頷く、どれほど嬉しかったらしいな。シノは彼女の肩にまで登り、体を丸める。

「とても心地いいですね」

「白銀の天使、そう言われていた奴ですよ、人を嫌っていたのに良く懐く……姫様はやっぱりなにか特別なんですよ」

「人を嫌っていた？」

「俺の下にあるシラムのような奴らは皆嫌われ者ですよ、俺を含めて」

シラムを始めてする4体は名を馳せる覇者、そこ一帯を治め、仕切っていた。それと同時に国単位の奴らからは目の敵にされ、討伐命

令が幾度となく命じられる。俺はその現地へ赴き、その光景を見た、確かシヤムの際は最後の最後まで追い詰められた所で出くわし、シヤムを庇いに入っただけな、200人以上の騎士や傭兵を相手にして大暴れした事を覚えている。その後シヤムは自分の縄張りを気にしてはいたものの、俺に恩があると感じたらしく、体はボロボロだったのに無理にでも着いて来た、だから魔装具の中に封じて休ませてやった、そこから始まりだった。

「皆？エルドさんも？」

「ああ、俺なんかは序の口さ、辛いのならその辛さを癒せる場所が必要なんだから、その場所が俺ってだけさ」

「それじゃあエルドさんは……」

確かにそうなのかも知れない、だが今ここで誰かにすれば俺が俺で居なくなってしまうかも知れない。

「いいさ、いつかきつとそんな場所に巡り合えると信じていればいいのさ」

「エルドさんは人がいいですね、私もエルドさんを頼りたく……なつて……しま、い……そう……で、すう……すう……すう……」

いつの間にか彼女が眠りにつき、小動物のような寝顔だった。

（こんな小さな子が国を抱えるなんて……希望はここにある、無いのなら俺が希望になるしかない）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7261u/>

七元一連の次元世界

2011年11月11日16時53分発行